

# 学生が老年看護学実習場面を通してとらえた高齢者看護観

## Concepts of Nursing of the Elderly Perceived by Students through Laboratory Practices

森田 恵子, 永田 美和子

### 要約

老年看護学実習中に記載された実習のまとめ用紙の分析を行い、実習場面を通してとらえた高齢者看護観について検討した。結果、《余暇活動》《コミュニケーション実施》《アクティビティケア実施》場面等、高齢者に変化が現れた場面から看護の必要性が認識されていた。実習場面を通して捉えた高齢者看護観は、【高齢者の人生史の理解と対象の立場に立ち受容する看護】【気分転換活動や残存機能の維持・QOLの向上】【感情表出とQOLの向上】【対象の能力の理解と自尊心を尊重する看護】【身体的・精神的・社会的側面から捉えた対象理解と個別性のある看護】【看護の喜びと継続看護】に分類された。

キーワード：高齢者看護観、実習場面、学びのまとめ、老年看護学実習

### はじめに

高齢社会の進展により高齢者人口が全人口に占める割合は、21.0%<sup>1)</sup>にも達しているが、日本の家族形態は三世同居率が低下し、現代の若者が高齢者と接する機会は減少している。一方、入院患者に占める65歳以上の高齢者の割合は平成14年6割<sup>2)</sup>を占め、臨地実習において学生が高齢者を受け持つ機会は多い。そのため、臨地実習を通して初めて高齢者に接することが多く、学生はコミュニケーションに戸惑うことが多い。このような現状の中で、看護基礎教育において高齢者を理解し、自己の高齢者看護観を養うことは意義深い。

K短期大学の老年看護学実習では、「高齢者の加齢に伴う身体・精神的変化、置かれている社会環境を理解し、健康レベルに応じた看護活動を行う。高齢者への看護活動を客観視し、自己の高齢者観や看護観を深める」ことを目的とし、4単位の実習を行っている。筆者ら<sup>2)</sup>の老年看護学実習の学びの分析において、実習目標に照らした実習評価を行った結果、自己の高齢者観や看護観に関する学びが最も多く、「意欲や生きがいと、生命の質(QOL)との関連を結びつけられる指導の必要性」が示唆された。

本研究では、老年看護学実習中に記載された実習レポートを分析し、学生はどのような実習場面を通

し、どのような高齢者看護観を養っているのかを明らかにすることを目的とした。

### 研究目的

老年看護学実習中に記載された実習のまとめ用紙を分析し、老年看護学実習場面を通してとらえた高齢者看護観を明らかにする。

### 実習概要

#### 1. 実習方法

長寿センター実習1週間では地域で生活する高齢者への援助を学び、介護療養型医療施設または介護老人保健施設実習3週間の実習では、1名以上の入所者または患者を受け持ち、実習をする。1週間に1回(水または金)は学内実習を行う。4週間の実習終了後、学習のまとめとして実習レポートを提出する。

#### 2. 高齢者看護観に関連する実習・行動目標

(目標) 高齢者への看護活動を通して、学生自身の高齢者観や看護観を深める。

(行動目標)

- 1) 高齢者の生活史に目を向け、高齢者の多様なあり方に対応する看護を考えることができる。
- 2) 高齢者のQOLが維持・向上するための看護について考えることができる。
- 3) 高齢者への接し方を理解し、高齢者の自尊心を

尊重したかわり方ができる。

- 4) 生活の場による老年看護の特徴や継続看護について考えることができる。
- 5) 看護職としての自己の姿勢や態度について考察し、自己の看護観について考えることができる。

## 研究方法

### 1. 対象

短期大学看護学科3年生76名中、同意・協力の得られた61名。

### 2. 期間

2005年4月18日～11月18日の実習中。

3. 分析方法：実習終了後の実習レポートに記載された「特に印象に残った場面を取り上げ、あなたの老年看護観について記述してください」の項目より抽出された場面および記述数（以下コード）を、内容の同質性、異質性に従い、カテゴリ化した。分析は研究者間で繰り返し検討した。

### 4. 用語の定義

＜余暇活動＞生活維持に不可欠な事柄以外に充当される自由時間を活用し、高齢者の日常生活活性化を図るために実施される身体的・精神的・社会的な看護介入。

＜レクリエーション＞遊びを基盤としていて、楽しさや喜びを感じ個人の生活と社会を活性化していく行為・活動のことで、主に余暇時間を利用して行われる。<sup>3)</sup>

＜アクティビティケア＞精神・社会的活動への援助。<sup>3)</sup>

## 倫理的配慮

対象者へ研究の目的、秘密厳守、研究協力・非協力が実習評価に関係がないことを口頭・文書で説明し、同意を得た。

## 結果

同意・協力の得られた学生61名の印象に残った場面（《 》内）は80場面であり、178コードであった。この中から記述内容を解読できない7場面25コードを削除し、73場面153コードをデータとして用いた。

73場面は表1の様に分類された。《余暇活動》が最も多く26場面（35.6%）、《コミュニケーション実施》《アクティビティケア実施》が各10場面（13.7%）、《清潔・衣生活援助技術》《場面なし》は各6場面（8.2%）、《面会》《排泄援助技術》各3場面（4.1%）等であった。特に《余暇活動》場面は、

表1 印象に残った場面数

	場面	場面数	(%)
1	余暇活動	26	35.6%
2	コミュニケーション実施	10	13.7%
3	アクティビティケア実施	10	13.7%
4	清潔・衣生活援助技術	6	8.2%
5	場面なし	6	8.2%
6	面会	3	4.1%
7	排泄援助技術	3	4.1%
8	活動・休息援助技術	2	2.7%
9	食事援助技術	2	2.7%
10	情報提供	1	1.4%
11	与薬の技術	1	1.4%
12	安全の管理技術	1	1.4%
13	環境調整技術	1	1.4%
14	生活指導技術	1	1.4%
	合計	73	100%

表2 学生が捉えた高齢者看護観

カテゴリ	サブカテゴリ	コード	サブカテゴリコード(%)
高齢者の人生歴史の理解と立場に立ち受容する看護	高齢者の人生歴史の理解	22	53(34.6)
	高齢者の生活リズムやペースを尊重する看護	6	
	高齢者の立場に立ち受容する看護	12	
	信頼関係の重要性	2	
	コミュニケーションの重要性	7	
	認知症患者への対応時の留意点	4	
気分転換活動や残存機能の維持、QOLの向上	趣味を取り入れることによる気分転換活動の重要性	10	34(22.2)
	趣味を取り入れることによるADLや残存機能の維持・向上	9	
	看護師の援助の重要性	2	
	趣味を取り入れることによるQOLの向上	13	
感情表出とQOLの向上	環境の変化による感情の表出とQOLの向上	13	24(15.7)
	環境の変化による感情の表出と全人的に受け止める看護	6	
	対象のニーズを捉え、思いやりのある看護	5	
対象の能力の理解と自尊心の尊重をする看護	高齢者の能力の理解と尊厳を守る看護	13	20(13.1)
	発達課題を捉えた看護の重要性	1	
	役割りを持たせる関わりの重要性	2	
	自尊心を尊重する看護	4	
身体的・精神的・社会的側面から捉えた対象理解と個別性のある看護	高齢者の身体面を捉えた看護	5	18(11.8)
	性への配慮	2	
	死への恐怖と予後の不安	3	
	観察の重要性	2	
	安全・安楽の重要性	2	
	情報の重要性	2	
看護の喜びと継続看護	日々継続する看護	2	4(2.6)
	看護の喜びと自己成長	2	
	合計	153	153(100)

散歩・歌・活花・剣道など多彩な活動がみられた。

153コードをカテゴリ化した結果、表2のように6つのカテゴリ（以下【 】内）と26のサブカテゴリ（以下〔 〕内）が抽出された。

【高齢者の人生史の理解と対象の立場に立ち受容

する看護】は最も多い53コード(34.6%)であり、6つのサブカテゴリが抽出された。〔高齢者の人生史の理解〕では、《余暇活動》場面から「個別性あるケアは、その人の生活史、人生史と密接な関係があり、生活史を知ること、相手の理解につながる。」、《コミュニケーション実施》場面から、「老年期だからこそ、生活背景が大きく関わっていて、その人らしく笑顔が見られ、生活できるようにQOLを考えることだと思う。」等の記述がみられた。〔高齢者の立場に立ち受容する看護〕では、《余暇活動》場面から「相手の話に耳を傾け、相手の立場にたつてよりそうすることが大切であり、日々の生活の中で見せるわずかな変化も見逃さず、よりよいケアが提供できる。」等の記述がみられた。他に〔コミュニケーションの重要性〕〔高齢者の生活リズムやペースを尊重する看護〕等のサブカテゴリが抽出された。

【気分転換活動や残存機能の維持・QOLの向上】は、34コード(22.2%)と次に多く、〔趣味を取り入れることによるQOLの向上〕では、《余暇活動》場面から「疾病を抱えていても、自分の好きなことは積極的に行っていたり、刺激を与えることで利用者様が笑顔で生活を送れるという点は、普通の高齢者と変わらない。利用者の生活の質を向上させる看護について学んだ。」、〔趣味を取り入れることによる気分転換活動の重要性〕では、「人間は、疾病をもってもあきらめずに自分の人生を楽しみ、悔いのないように生活を送ることが大切です。」、〔趣味を取り入れることによるADLや残存機能の維持・向上〕では、《清潔・衣生活援助技術》場面から「高齢者は手がかかると困ってしまうのではなく、その人の生活観やADL状況をしっかりと把握することで、やる気へとつなげADLの維持やQOLの向上につながると考える。」等の記述があった。

【感情表出とQOLの向上】の〔環境の変化による感情の表出とQOLの向上〕では、《余暇活動》場面から「利用者の漠然とした不安や限られた時間を苦痛とともに生きることは、QOLを著しく侵害することにつながることを学んだ。」、〔環境の変化による感情表出と全人的に受け止める看護〕では、《面会》の場面から、「患者様が生きていく活力や希望が低下していくのは、長期入所しており、病棟から出ない生活が多くなり、外的刺激が少ないから起こるのだと学びました。」等の記述が見られた。他に〔対象のニーズを捉え、思いやりある看護〕が抽出された。

【対象の能力の理解と自尊心を尊重する看護】の

〔高齢者の能力の理解と尊厳を守る看護〕では、《コミュニケーション実施》場面から、「私たちより多くの知識があり、私たちより多くのプライドを持っている。それは、人生を積み重ねれば積み重ねるほど大きく、私たちは決して忘れてはいけないことである。」、〔自尊心を尊重する看護〕では、《与薬の技術》場面から、「高齢者には、長い人生を生きる中で経験や知識として得たことに、自信と誇りがあると思います。援助を行うときは、必ずその部分も尊重することが大切だと思います。」等の記述がみられた。他に〔役割を持たせる関わり的重要性〕〔発達課題を捉えた看護の重要性〕が抽出された。

【身体的・精神的・社会的側面から捉えた対象理解と個別性のある看護】の、〔高齢者の身体面を捉えた看護〕では、《コミュニケーション実施》場面から「私たちにとってはただの便秘だが、高齢者にとっては便がでないということは私たち以上に不快なことであり、それが気になることに気がつき、それに対する看護ができて、とても良かった。」、〔死への恐怖と予後への不安〕では、《余暇活動》から「何をお祈りしていたかはわかりませんが、家に帰りたくても帰れないという思い、左麻痺であり介助であることから今後の不安が考えられます。」、〔性への配慮〕では《コミュニケーション実施》場面から、「こういったこと(歳をかさねても女性)に対しても、理解を示し、柔軟な姿勢で看護を行っていかねばならないと思った。」等の記述が見られた。他に〔観察の重要性〕〔安全・安楽の重要性〕等が抽出された。

【看護の喜びと継続看護】では、〔日々継続する看護〕では《活動・休息援助技術》場面から、「午前は足浴、午後は口腔ケアを行うというように、毎日行っていく継続看護が大切であると学んだ。」、〔看護の喜びと自己成長〕の《アクティビティ実施》場面から、「以前の自分より大きくなれた気がする。」等の記述が見られた。

## 考 察

老年看護学実習中に記載された実習のまとめ用紙の分析結果より、老年看護学実習場面及び学生が捉えた高齢者看護観を考察した。

学生の印象に残った場面は、《余暇活動》が最も多く、以下《コミュニケーション実施》《アクティビティケア実施》場面等であったが、これは実習施設が、介護療養型医療施設または介護老人保健施設

というケア中心ではなく、ケア中心の施設であったことが影響したものと考えられる。対象が病状安定期にあり、実習施設の入院・入所高齢者には余暇時間が十分にあり、機能回復や残存機能向上のためには、余暇活動を看護として取り入れる必要性を学習した結果であると考えられる。

余暇活動場面が最も多かった理由は、受持ち高齢者の看護診断名として、気分転換不足、活動耐性低下、慢性混乱などを挙げる事が多く、高齢者の生活史などを基に散歩・歌・活花などの具体策を実施した結果、高齢者に変化が現れ印象に残ったと考えられる。田辺<sup>4)</sup>は、「高齢者は能力を発揮できるようなレク活動や、その人の持つ能力や、生活史との関連を捉えたレクリエーション活動の必要性」を述べており、学生の個別的な関わりが高齢者に変化を生じさせたものと考えられる。

《コミュニケーション実施》《アクティビティケア実施》場面も同様に、高齢者の言動や行動が受け持ち前とは異なった変化として現れる場面である。高齢者が見せる予想外の反応や変化の大きさは、学生の印象として強く残り、看護観を刺激したのと考えられる。特に、受持ち高齢者には、治療上の制約が少なく、《余暇活動》場面は、対象の人生史を踏まえ、学生の感性や創造力が発揮できる場面であるため、主体的な看護介入が容易であると考えられる。今田<sup>5)</sup>は、「学習は、学習者を取り巻く環境との絶えざる相互作用のなかで生じている。」と述べているように、他の場面よりも受持ち高齢者への看護介入場面が、看護観を養うことに効果的であったと考える。そのため、《余暇活動》《コミュニケーション実施》《アクティビティケア実施》場面は自己効力感が得られ、看護観を構築する機会になったと考える。

学生が捉えた高齢者看護観とは、【高齢者の人生史の理解と対象の立場に立ち受容する看護】【気分転換活動や残存機能の維持・QOLの向上】【感情表出とQOLの向上】【対象の能力の理解と自尊心を尊重する看護】【身体的・精神的・社会的側面から捉えた対象理解と個別性のある看護】【看護の喜びと継続看護】であり、看護観に関する実習目標・行動目標はほぼ達成された。筆者ら<sup>2)</sup>の老年看護学実習の学びの分析において、実習グループでの学びについては、「意欲や生きがいと、生命の質(QOL)との関連を結びつけられる指導の必要性」が示唆されたが、本研究においては上記のカテゴリ内容から、意欲や生きがいと生命の質(QOL)との関連は学習されているこ

とがわかった。これは、個人指導や評価面接時、カンファレンスの場等を用い、高齢者看護学における意欲や生きがいと、生命の質(QOL)を高める看護の重要性を指導した結果と考える。学生にとって、生命の質(QOL)とは抽象的な概念であるが、実際に自分が行った場面を用い実施した行為を評価することで、自分の行動と生命の質(QOL)の関連が学習されたと考える。

反面、高齢者の生命危機や安全の重要性に関しては、[死への恐怖と予後の不安][安全・安楽の重要性]等の精神的危機に関する認識であった。高齢者の疾患の特徴として、症状が非定型的であり、急激な変化を来すことがある。病状安定期においても、異常の早期発見を念頭におき関わる必要がある。特に、受け持ち高齢者は、転倒・転落のリスクが高く、安全を配慮した看護が要求される。しかし、学生にとっては、印象に残った場面であっても《与薬の技術》《安全の技術》に関する場面は少なく、看護観として認識するまでには至っていない。今後の課題として、【身体的・精神的・社会的側面から捉えた対象理解と個別性のある看護】として認識できるよう、安全・安楽や生命の危険を守る看護の必要性を指導する必要性が示唆された。カンファレンスや臨床指導者の経験した事例を語る場面の設定等が必要と思われる。

また、保健医療福祉専門職の一員としての看護のあり方に関する記述内容は見られなかった。昨年の筆者ら<sup>2)</sup>の研究においても、これに関する記述は少ない。実際の臨地実習において、作業療法士や介護職と一緒に援助を行う経験や、臨地でのカンファレンスに参加する等他職種との関わる場面は多い。しかし、学生が認識した場面は、《情報提供》場面のみであり、ケアカンファレンス参加や他職種と行う援助は、させられ意識が強く、主体的に自己が関わる経験として認識されていないと考える。見藤<sup>6)</sup>は看護師の主体性について、その人の価値観、考え、判断などに基づいて行動行為し結果の責任を負うことであり、人が生まれながらにして持っているものではなく、育まれるものであると述べているように、学生が主体的に援助やカンファレンスを経験し、他職種との関わりを看護として認識できるような指導のあり方が示唆された。

## まとめ

老年看護学実習中に記載された実習のまとめ用紙

の分析結果より、以下の結論が得られた。

1. 《余暇活動》《コミュニケーション実施》《アクティビティケア実施》等の場面は高齢者に変化が現れやすく、看護の必要性が認識され、学生の高齢者看護観を構築する場面である。
2. 学生の捉えた看護観とは、【高齢者の人生史の理解と対象の立場に立ち受容する看護】【気分転換活動や残存機能の維持・QOLの向上】【感情表出とQOLの向上】【対象の能力の理解と自尊心を尊重する看護】【身体的・精神的・社会的側面から捉えた対象理解と個性のある看護】【看護の喜びと継続看護】であった。

### おわりに

老年看護学において、講義で得た知識を統合し、看護実践能力を習得すると共に、豊かな高齢者像に基づいた高齢者看護観を養う臨地実習での学びの意義は大きい。

今後は、安全・安楽や生命の危険を守る看護の必要性や、保健医療福祉専門職の一員としての看護師のあり方に対する学生の認識を確認し、検討していきたい。

### 引用文献

- 1) 国民衛生の動向：厚生統計協会，53（9）：33-72，2006.
- 2) 永田美和子，森田恵子，渡邊充子：ラベルワークを活用した老年看護学実習における学びの分析．桐生短期大学紀要，16：87-94，2005.
- 3) 和田攻ら編：看護大辞典．医学書院（東京），24-2814，2002.
- 4) 田辺亜由美，流石ゆり子：高齢者のレクリエーション活動に関する研究-施設と実態と高齢者のニーズ．保健の科学，46：65-70，2004.
- 5) 今田寛：学習の心理学．放送大学教育振興会（東京），174，2000.
- 6) 見藤隆子：人を育てる看護教育．医学書院（東京），86，1995.

## Concepts of Nursing of the Elderly Perceived by Students through Laboratory Practices

Keiko Morita, Miwako Nagata

### Abstract

Students' concepts of elderly nursing obtained through laboratory learning were studied by analyzing the summary sheets in which it is described how to define elderly nursing. The results indicate that changes appeared on the elderly while they were participating in leisure activities, making communications, and receiving activity cares with assist of nursing students. Through these experiences, students recognized that the availability of nursing could help the elderly to maintain their better quality of life.

The students' concepts of elderly nursing perceived through practical situations can be classified into 6 categories: (1)Nursing to be provided with accepting and understanding the life history and circumstances of elderly subjects, (2)Activities for diversion, maintenance of remaining systemic functions, and improvement of life quality, (3)Helping elderly subjects express their feelings and enhance their quality of life, (4)Nursing to be provided based on understanding of elderly abilities and respecting self-esteem of individual elderly subjects, (5)Viewed from the points of physical, spiritual, and social aspect, (6) Pleasure of nursing and its continuous contribution".

Keywords: Concepts of nursing for the elderly, Practical situation, Summary of learning activities, Laboratory practice of elderly nursing